

やはり俺が病で余命が分かっているのは間違っている

アリババ@izayoi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小町も同じ高校に入り、これまでどおりの日常を過ごせると思っていたやさきに八幡が…

この続きは小説を読んでみてください！

目次

日常	1
日常2	6
突然の出来事	11
葛藤	15
覚悟	18
交わらない道	23
そして彼は…	27

日常

どうも皆さんこんにちははヒツキーこと比企谷八幡です★

キモイのでやめよう。今日から高校3年だ、高校という枠組みの最後の年である。俺はまだ本物をまだ探しているが自分にとって本物とは何のことか皆目検討もつかない。今年であいつらと一緒に見つけたいと思っている。

それにしても今日は体がしんどいなく学校休みみたいなく

小町「お兄ちゃんどうしたの？」

こいつは俺の妹比企谷小町、俺と違って愛嬌もよく親には甘やかされ、周りの男子からは美少女でモテまくりの、俺の自慢の妹である！異論は認めんぞ！そこシスコンと思うなよ！そして小町も今年から俺と一緒に高校に入学で今日がその入学式である！やった！これで毎日ずっと小町と一緒にいれるぞ！キモイな…とりあえず会話を続けよう

八幡「なんでもないぞ。むしろ何も無さすぎてつまらないまである。あれ？俺の人生こんなんでいいのか？」

むしろ泣きたくなつたままであるがなんとか耐えた！

八幡偉い！オエ吐きそうもうこのネタは絶対やめよう

小町「ハア、ごみいちゃん何またしょーもないこといつてんの、ごみいちゃんには小町がいるから無いもないわけじゃないでしょ！あつ！今の小町的にポイントちよー高い！」

とりあえずは、ごまかせたので良かったけど、小町ちゃんごみいちゃんはないでしょ、お兄ちゃん泣くよ。まあ体調はやはりちよつとおかしいが、このぐらいなら大丈夫だろ、比企谷菌は病気なんかに負けないぞ！…泣きそう

八幡「あーはいはいポイント高いよー。あーもう俺もう出るわ」

小町「うわー適当だなー。お兄ちゃん調子が悪いなら早く言って、保健室とかに行くんだよ」

八幡「分かった分かった、んじやいつてきます」

外に出ると、快晴で太陽がキラキラとしていた。

八幡「(いい天気だがなー太陽眩しくて八幡砂になりそう)」
いつも通りくだらないことを頭で考えながら自転車に乗り学校に向かった。

学校に着いて自転車を止め周りを見ると、まるで自分はリアルを充実してますって感じに友達としゃべっては笑いあっていた、そしてグランドを見ると朝練をしている部活組が汗をかきながらも爽やかに練習をしていた。

くっそなんであんなに爽やかなんだよ！俺なんて汗だくになって帰ると小町に「お兄ちゃんくさい！」って言われるんだぞ！あの時の小町の目はほんとに臭いものを見ていた目だった…

そんなことを考えながらも教室に向かった。

教室に着いて、早足で誰にも目もくれず席に向かい、イヤホンを耳に付けて机と椅子に体を預けて寝る体勢に入っていた。これはぼっちの習性である。こうしないと周りの会話に間違えってはいってしまふ

あれは中学の時、俺の真後ろの席で女子が「今日あつついよね」とつぶやいてたのに対して俺は「むしろ蒸し暑いよね」と後ろを振り返って見ると、2人の女の子がえっ？って顔でこっちを見ていた、あれは本当に恥ずかしかった家に帰って2時間くらいは布団の中で悶えてたな…

黒歴史を思い出していると、誰かが肩を叩いたのでちっ誰だよという目をしながら起きると、目の前には天使がいた

戸塚「おはよー！八幡！今日は早いんだね！」

八幡「毎朝俺に味噌汁を作ってくれ…」

戸塚「えっ!?八幡！な、何言ってるの／＼／」

八幡「はっ！ごめん戸塚ちよつと夢を見てた」

あつぶねえくほんとともう勢いでプロポーズする所だった

今プロポーズしても断られるに決まってるもう少し仲を深めてからじゃないと、ん？戸塚は男じゃないの？何言ってるんだ戸塚は戸塚だろ？共通認識だろうが！

戸塚「もー八幡たら、冗談でそんなこといったらダメだよ！めっ！」

ブンブン

八幡「ほんとに悪かったよ、ごめんな？」

戸塚「いいよ！八幡もそんなに謝らなくても僕もそんなに怒ってないからね」

その太陽の輝きのような笑顔だった…この笑顔守るためなら俺は何でもする!!たとえこの地球が壊れようとも戸塚は俺が守ってみせる!!これももう戸塚ルートでいいんじゃないやね?突っ走っていい?

結衣「やつはろー!さいちゃん!ヒツキー!」

戸塚「やつはろー、由比ヶ浜さん」

八幡「ちっ邪魔すんじゃないよ」

結衣「ヒツキー酷い!!」

戸塚「八幡そんな言い方したらダメだよ」

八幡「俺と戸塚の会話の時間を邪魔するやつはたとえ先生でも許さねえ」

結衣「ヒツキーのさいちゃんラブもいくところまで言っちゃったね
: ヒツキーキモイ」

こいつは俺と同じ部活に入っている由比ヶ浜結衣見たとおりバカっぽいがこれでも3年になっている、まあそれはあの鬼の教官のおかげである。こいつはトップカーストのコミュニティに入っており、コミュニケーション能力も高い。見た目も客観的にみて、可愛い、客観的だよ?そしてあの胸だ。

結衣「ヒツキーどうしたの?あ、あたしのことじっと見つめて／＼」

八幡「わ、悪い…」

くそやつぱりあの胸には目が引き寄せられる!これが万乳引力の法則か:どっかの誰かさんには絶対無理そうだな:つと殺気をどこから感じる!危ないな余計なことを考えるのをやめよう:どこから殺気飛びしたんだろ?

平塚「おらー!お前から体育館にいけ!入学式が始まるぞー!」

いつの間にかチャイムがなっていたのか

八幡「ほらお前らもいくぞ」

結衣「そうだね！今日小町ちゃんも入学してくるんだよね！」

戸塚「そうなんだね！良かったね八幡！」

八幡「いや、心配だ」

戸塚「お兄ちゃんからしたらやっぱり心配だよね」

結衣「いやー？さいちゃん多分心配してるのは…」

八幡「周りの友達に俺みたいなお兄ちゃんがいることをバレないようにはしないといけないから小町に学校ではあんまり会えなくて、明日からの俺が心配だ…」

結衣「でたー!!シスコン！」

戸塚「ほ、ほんと八幡小町ちゃんのこと好きだね」ハハハ

会話しながら歩いてたらいつの間にか体育館に着いていた

八幡「俺、席こつちだから」

結衣、戸塚「また後で（ね）！」

そうして入学式が始まった。

入学式とは日本に入れば絶対に学校に行かされる。それをおめでたいように言つて、これから月から金曜日まで学校に行かされるためのいわば自由との決別式でもあると俺は思う。行きたくもないのに毎日起きて、ランドセルやカバンに重い教科書をいれ、そのまま登校させられ、意味のわからん数式をひたすら鉛筆でその問題をとこうとすると、周りの計算が早くできたやつには、「あつれー？ヒキタニまだ出来てないの？」と煽られる。人の名前もちゃんと読めないやつにバカにされる気分は控えめに言つてもくそ悪い、絶対にいるさない金城くん！…論点がずれたがつまり入学式とは自由との決別式であると俺は思う。…校長話長いな

こうして小町の入学式が終わった、ん？大志？ソレダレボクワカンナイ

そして放課後になった。とりあえずマツ缶買ってから行こう、由比ヶ浜はまだ三浦達と喋ってるし。

そういえばこのクラスほんとにクラス替えしたのか？2年時のメンツとあんまり変わってないぞ？…はっ！まさかあのアラサー教師の仕業か！

職員室にて

平塚「ん？誰かにバカにされたみたいになんかムカムカしてきたぞ」

と、まあとりあえずマツ缶買ったし、部活にいくか

日常2

八幡「ふう〜マツ缶も買ったし部室にいくか」

俺は高校2年の時に高校生活を振り返ってという作文のことでひねくれたことを書き、平塚先生に職員室に呼ばれた、その時に平塚先生に罰と更生もかねて、奉仕部という部活に入った。奉仕部とはただのボランティア部ではなく部長いわく魚にエサをあげるのではなく、とり方を教えるのだとまあつまりあれだ手助けはするがどうなるかはあなた次第ということだ。

八幡「本当にいろいろあったよな…」

最初は由比ヶ浜の依頼…黒炭だったなああれでも由比ヶ浜は納得してくれたし、まああれはあれで良かったんだと思う。次は俺の天使戸塚の依頼、あれで男とか普通の女子みんな泣くぞ！ってほど可愛かった！戸塚の性別は戸塚だ！異論は認めんぞ！あれ？このくだり前にもやったような？まあともかくあの時は大変だったな、葉山達がテニスコートに乗り込んで来て、テニスの試合をして、勝ったは勝ったが終わった時は葉山コールがテニスコートで叫ばれてて勝ったのは俺なのに…くっ！これがリア充とぼっちの差か!!なんか目から汗が…

まあそのあといろいろあったよな小学生のいじめ問題を解消したり、文化祭でのこともそうだし、修学旅行の嘘告白やら、一色の生徒会選挙のことから始まったクリスマス会のこと、あれは恥ずかしかったな〜八幡照れ屋なのテレテレ

キモイな…と、ともかく俺の高校生活は劇的に変わったな多分昔の俺に言っても信じないと思うぞ。

柄にも似合わずそんなことを思い出しているうちに部室の前に着いていた。

八幡「まあともかく頑張るか」

ガラツ

八幡「うす」

雪乃「はあくあなた挨拶もまともにできないの？ほんとに私じゃな

ければ警察に電話していた所よ、不審者谷くん」

八幡「えっ？挨拶ちゃんとしなだけで不審者に間違えられるの？おかしくない？」

雪乃「だってあなたの顔、すごく怪しいのだから。あつごめんなさい、顔じゃなく目だったわ、ごめんなさいね。」

八幡「おい、2回も謝るなよ、余計に傷つくだろうが、あと目はデフォだ」

雪乃「うふふ、冗談よ、こんにちはは比企谷くん」ニコッ

八幡「お、おう」メソラシ

そんなにいい笑顔すんなよ、一瞬ときめいちゃまっただろうが、普通だったら一目惚れして告白して振られるレベル、って振られちゃうのかよ！ダメじゃねーか

雪ノ下雪乃、学年1位の成績をもつ美少女、才色兼備であるがすごく口が悪い、ことある度に俺を罵倒してくる。しかしこいつよりも強い悪魔のようなお姉さんもいる。あの人は本当に魔王だよ…んっそしてこいつが奉仕部部长である

雪乃「由比ヶ浜さんは？」

八幡「まだ教室で三浦たちと喋っていたからもうすぐ来るんじゃないか」

雪乃「そ、そうだったらそれまで二人つきりね／＼／＼」

八幡「しよ、そうだな／＼／＼」

そんなこと言ったら誤解しちゃうだろうが！そしてなんでそんなに頬を赤くしてるんだよ！ち、違う騙されるなこれは巧妙な罠だ！どうせ俺がそれでキョドっている所を見て嘲笑うつもりだろ！俺は中学の時に学んだはずだ！思い出せあの黒歴史を！…泣きそうになるからやめよう

ガラッ

結衣「やつはろー！ゆきのん！ヒツキー！」

雪乃「やつは…コホン、こんにちはは由比ヶ浜さん」

なんで今言いかけたの？俺が居ない時はその挨拶なのかな？

八幡「おう」

結衣「もうヒツキー！ちゃんと挨拶してよ！」

八幡「お前もちやんとした挨拶ではないだろ」

結衣「はあ？あたしにとつての挨拶はこれなの！」

八幡「はいはい、こんにちは、これでいいか」

結衣「最初っからそう言えばいいのに！ヒツキーキモイ！」

雪乃「その男にまともな挨拶ができれば、もともと1人にならないと思うわ、だから由比ヶ浜さん無理なことを要求するのはやめましよう」ニコツ

八幡「そうそう、挨拶なんてする人が学校にいなかったから友達がないっておい別に無理じゃねえーよ」

雪乃「あら？あなたが挨拶をちやんとできるかしら？そうでなくても目が腐った魚の目をしてるのだから初対面の人だと見てしまった時に悲鳴をあげるのではないかしら」

えっ？もう目だけで人を驚かせることができるの？

俺人前に出れないじゃん！

八幡「そんな目だけで人を驚かせることが出来るなら俺はもうとつくに天然記念物にでも登録されているよ」

雪乃「あなたにそこまでの才能はないと思うわ、残念谷くん」

結衣「あはは、二人とも相変わらずだね」

今日も雪ノ下の罵声と由比ヶ浜の語彙力のないディスリをあびて部活が始まった。べ、別にMとかじゃないんだからね、男のツンデレはやっぱりキモイな。そんな感じで喋っていると部室の扉がガラツと開いた

小町「皆さんやつはろーです！小町が来ましたよー！」

結衣「小町ちゃんやつはろー！」

雪乃「こんにちは、小町さん」

八幡「おう、もう来たのか」

小町「ムフフ〜だつて〜小町早くお兄ちゃんに会いたかったんだもん！あつ！今の小町的にポイント高い！」

本当に最後さえなければなー素直に喜べるのになあ

結衣「あ、相変わらずだね」アハハ…

雪乃「それで小町さんどうしたの?」

小町「あ!そうでした!雪乃さん小町も奉仕部に入れてください!
入部届けも持ってきました!」

結衣「ほんと!?やったー後輩が入部するー!」

雪乃「ええ、歓迎するわ。ようこそ奉仕部へ」

八幡「いいののか?俺ら今年で卒業したらお前1人かもしれないんだぞ」

俺らは今年で卒業だ小町1人にこの部活をやっていたら寂しいんじゃないかと心配したが

小町「うん!小町生徒会にも入りたいから今年は奉仕部に入って来年からは生徒会で頑張るから大丈夫だよ!」

余計な心配をしてしまったかな?まったくうちの妹は優秀だよ
ガラッ

いろは「せんぱい〜やばいです〜助けてください」

こいつは一色いろは、去年の生徒会選挙でクラスの女子からいやがらせで生徒会長に立候補させられたやつだ。こいつは見た目は可愛い
が、性格がすごくあざといやつなんだ。そのせいで女子から妬まれ、
こういうことをやられるようになった。その時に雪ノ下と由比ヶ浜が
生徒会長をやるとか言い出すから、俺は小町のお願いで雪ノ下と由比ヶ
浜を
生徒会長をやめさすためにこいつを説得して生徒会長になつてもらった。
そのせいかこいつはことある度に俺に「助けてくださいせんぱい〜」、
「責任とつてくれるんですよね?せーんぱい?」などと脅迫を受けている。

結衣「いろはちゃん、やつはろー」

雪乃「こんにちは、一色さん」

小町「あれ?この人って生徒会長ですよ?先輩ってお兄ちゃんのこと?
ムムムヨメコウホガマダイタノカ」

小町ちゃん小声でも聞こえてるよ?俺にしか聞こえてないけど

いろは「あれ?先輩この子は?」

八幡「ああお前知らなかったよな。この子は俺の世界一可愛いマイ
スイートシスターの比企谷小町だ」

小町「もうくお兄ちゃんたら照れちゃうでしょ／＼」

俺は真実を言っているだけだ！ああー小町はほんとにかわいいなあー…はっ！もしやこの空間に戸塚もいたら俺にとってここは天国になるんじゃないか！コマチエルとトツカエル、最高じゃないか！！雪乃「あなた今ものすごく気持ち悪い顔してるわよ、見ていられないくらいね。吐きそうだわ」

いろは「先輩本当にキモイです」

結衣「ヒツキーまじきもい!!」

小町「ごみいちちゃんキモイ…」

俺に味方はいないのか…

そんな感じでそのあとは一色の話をきき、生徒会室にいきこき使われてしまうのでした。体調もまだ悪いしなんだから。とりあえず家に帰るか。小町は今日高校でできた友達の家にお泊まりらしいからな。友達できるの早くね？そんなもんなの？

突然の出来事

家に帰り着いたら、珍しく親父とお袋がいた。

お袋「あら？おかえりなさい」

八幡「今日は珍しく寝てないんだな」

親父とお袋はいつも会社で遅くまで仕事してるから家にいる時はだいたい寝ている。社畜ご苦労さまです！やっぱり働きたくねえな

親父「おいバカ息子、俺の可愛い小町はまだ帰ってこないのか。今日はあいつの入学式だからお祝いパーティーだ！」

この親父も本当にクソだな、俺の時は1万円を渡してきただけに。まあお袋が美味しい俺の好物を作ってくれたから嬉しかったが。

八幡「知らねえのかよ、あいつ今日友達の家泊まって来るらしいぞ」

親父「な、なんだと！聞いてないぞそんなこと!!」

八幡「お袋は知っていたはずだぞ」

お袋「あら？あなたには言ってなかったかしら？まあいいや」

親父「よくないぞ！」

お袋「うるさいわね！あなたはそろそろ娘離れするべきだわ」

我が親父ながら気持ち悪いな。昔からそうだった、家族旅行も小町が行きたいといったら親父は有休を使い、旅行に行っていた、俺入ってないけど。べ、別に寂しくなかつたんだからね！外に出たくなかつただけなんだから！

お袋「八幡あなた今ものすごく気持ち悪い顔してるわよ」

親父「うう…小町」ナミダメ

なにこれ？すごくカオスなんだけど。ていうかお袋今のは普通に傷ついたぞ

八幡「とりあえず飯食おうぜ。腹減った」

お袋「そうね、何食べようかしら」

親父「…久しぶりにくそ息子と3人で外食するか」

なっ！あのクソ親父が俺を入れて外食に誘うだと！

これは明日槍が降るか核爆弾が落ちてくるぞ！

お袋「八幡流石にそれはないと思うわ」

八幡「なんで心の中読んでるんだよ…」

親父「うるさい！早く行くぞ！どこに行きたい？」

お袋「そうね〜八幡はどこがいい？」

八幡「サイゼ」

親父、お袋「ぶっ、アハハ」

八幡「なに爆笑してんだよ」

お袋「だ、だってあなた高校3年にもなつて両親と行くところがファミリールレストランって、そりや笑うわよ」アハハ

親父「本当にお前高校3年なのか？」ククク

八幡「うるせえ、いやなら別のところでいいだろ」

くっなんでサイゼがダメなんだ！美味しいだろ！ドリアとかスパゲッティとか最高じゃないか！

お袋「まあお金もそんなにかからないし、サイゼにしましよ」

親父「まあそうだな、お前にはそれくらいがちょうどいい」

八幡「うるせえよ…」

親父とお袋とこんな風に喋ったのは久しぶりに感じる。小町が生まれてからは俺はそんなに喋ってなかったしなまあ親もこんなひねくれた子より可愛い小町の方に行くに決まってるよな

お袋「あんたそんなこと思ってたのね」

八幡「だから心読むなよ」

お袋「たしかに小町が生まれてからあなたと喋ってなかったわね…ごめんなさいね私たち親なのにあなたのこと全く見てこなかった」

八幡「いいよ別に…俺はそれでも感謝してるんだ俺と小町のために朝から晩まで必死に働いてるお袋と親父にだから謝らないでくれ」

お袋「八幡…ありがとうね。」

八幡「お、おう、とりあえず俺制服着替えて来るわ」

そう言っってリビングから出て、階段を登ろうとすると

八幡「ぐっ…頭が…」

俺の頭と胸あたりに激痛が走り、その激痛に耐えられず、階段から

転げ落ちた

お袋「は、八幡!!どうしたの!!返事して」

親父「おい!!どうした!!」

意識が遠のく前にこれだけは言っておかなければ!

八幡「小町:れ、んらく、するな:」

そう言つて俺は意識から手を離れた。

―親父 side 1

親父「おい!!八幡!!目を開けろ!母さん救急車を呼べ!!」

お袋「は、はい!!」モシモシキュウキュウシヤキテクダサイ

意識が無さそうだ、このバカ息子が、それが意識失う前に言うことなのか!!!とりあえず早く来てくれ!!頼む!!

―親父 side out 1

―八幡 side in 1

目を覚ますとそこは知らない天井だった、ああ、そう言えば俺倒れたんだつた。ならここは病院のベットか。

倒れる前のあの頭と胸の激痛はおさまっていた。

八幡「(なんだつたんだ?あの痛みは)」

そしたら病室の扉の開く音が聞こえた。親父とお袋の声も聞こえる。お袋が泣いているようだった。もう1人白衣を着た、おっさんが入ってきた。

医師「目が覚めたようだね。どうだい?体の調子は」

八幡「今は何ともないです」

医師「そうだろうね、でも君はあと4ヶ月で死ぬよ」

八幡「は?」

医師「君の病気は初めて発症した、新種の病だ、脳と心臓に見たこともない異常があつた。どちらともう治すことが出来ない」

ふあ!?!俺あと4ヶ月で死んじゃうの?本当にか!しかも新種の病気ってなんだよ:」

八幡「そう:ですか」

医師「冷静だね」

八幡「だつて医者が言うなら、真実なんでしょう、だつたら信じる
しかないですよ」

医師「そういうものかね、とりあえず詳しいことを君の両親に伝える
から、君はこれからどうしたいのか、考えてくれたまえ」

そう言つて医者と親父とお袋が出ていった。

お袋泣いていたな：悪いことをしてしまった。そう言えば小町に
は伝えていなさそうだな。とりあえずはよかった。これからどうし
よう？俺はあと4ヶ月で何ができるんだろ？

八幡「本物は手に入らなそうだな…」

そう呟いて布団の上にひとつの雫が落ちていった。

葛藤

あれから両親も病室に帰ってきて、少しでも話をしたが二人ともシヨックがでかいのかあまり話さなかった。

八幡「(ちゃんと俺のこと心配してくれてたんだな...)」
そして帰る準備をし、家に帰った。

お袋「八幡：今日はもう寝なさい、これ以上体に負担かけては行けないから」

八幡「ああ：お袋、親父少し頼みたいことがある」

お袋、親父「な、なんだ？(なに?)」

八幡「小町には俺の病気のこと言わないでくれ。もし小町が知ったら俺はこの家を出ていく」

お袋「な、何を言ってるの!!」

親父「まあ落ち着け母さん、話を最後まで聞こう、それでどうしてだ？」

親父が俺の話をちゃんと聞いてくれるのがなんか嬉しいな、それでも俺は言わなければならぬ。

八幡「小町は多分、知ってしまったら。あいつが周りの人達に伝えてしまつてその周りの人達まで悲しくさせるのが嫌だから、俺は一人でひっそりと死にたい」

俺はあいつらの知ってしまった時の悲しそうな顔を見たくない。どうせなら最後まで知られることなくいつの間にかいないことにしたい方がいい。そんなことを考えているとお袋が近づいてきて手を振り上げた

パン

左頬をひっぱたかれ、驚いた顔をして、お袋の方を見ると、お袋の両目には涙がいっぱい溜まっていた

お袋「お、お願いだから。一人で死ぬなんて言わないで！あなたには私たち親がいるじゃない!!」

親父「そうだぞ、八幡。お前には少なくとも俺らが一緒にいる。だからそんな悲しいことを言うな。お前はまだまだ子供なんだから

もつと俺らに頼れ」

八幡「お袋：親父：」

すこし驚いた俺のことをここまで心配をしてくれて、なおさら俺と一緒にいてくれる人達がまだいたなんて想像もつかなかった

八幡「：わかった。だがやっぱり小町には言わないでくれ。息子からの最後のお願いだ」

やはりこれだけは譲れなかった。あいつの、いやあいつらの少しでも悲しい顔を俺は見たくない。だからあいつらには絶対に知られたくない

親父「お前の気持ちは十分にわかった。でももし小町にバレた時にお前がこの家から出ようとするものなら俺らは自殺するぞ。だから出ていくなんで二度と言わないでくれ」

八幡「わかった。」

俺は前まで親父のことをクソと言ってたが、訂正しないと、俺は幸せもんだな

それで会話は終わり、みんな自分の部屋で寝ることになった

八幡「(今でも実感が無いな。俺ほんとに死ぬの?)」

八幡「：喉がかわいた、下に降りてマッ缶でも飲もう」

マッ缶を取りに部屋を出て階段の近くまで行くと。両親の部屋から泣いている声が聞こえた。俺は申し訳ないと思いつつも部屋の扉に耳を当てた

ーお袋 side inー

お袋「な、なんであの子がこんな目に遭わないといけないの!!」ナミダ

親父「落ち着け!俺らまで精神が安定しなかったら、あいつまでもが不安になるぞ」

お袋「でも、：それでも：なんで!!：なんでうちの子なのよ…」

親父「：とにかく、俺ら親がすっかりしないとイケないだろ!あいつの前ではできるだけ元気でもいつも通りでいてやろう、きつとあいつもそれを望んでいる」

お袋「：分かったわ：でも今夜だけは泣かせて…」

親父「ああ…いいぞ」

お袋「ううう」ナミダ

そうよね！私たちがすっかりしなといけなのだから今夜だけは泣かせてね八幡

―八幡 side in―

八幡「親父：お袋：本当にありがとう」

俺はあの二人にももちろん今まで感謝をしていたが、今は両親に何かあげたい、何かで恩返しをしたい気分になったな

八幡「…考えておくか…」

俺はそう思いながら、マツ缶を取り自室にかえってベッドに寝転がった。

八幡「(少し頭の中を整理して、まず何をすべきかを考えるべきだな)」

俺はこれから何をしたいんだ？あいつらには知られたくない：じゃあどうする：一色の会長の件最後まで責任は取れなさそうにないな：小町も奉仕部に入部したばかりだから、俺がいなくなっても居場所はある。

俺は頭の中で考え、考え尽くして答えが出た。これが1番誰も傷つかずにあいつらに知られることなく、死ねることができる方法だ。正直今まで中で1番に最低な方法だがこれをするしかない。

そう心に固くきめ、目をつぶり睡魔に意識を預けて行った。

俺はやはり最低だ

覚悟

目が覚めるとまだ空がうつすらとしか明るくなかった
携帯で時間を見てみると5時だった。

八幡「なんか早く目が覚めちまったな…」

そう言いながらも布団から出ようとは思わなかった。

ち、違う！俺が布団から出ないんじゃないやなくて、布団が俺を出させてくれないんだ！ま、まあ？俺も布団のこと好きだしな…はっ!?もしかして相思相愛なのか!?だとしたらもう結婚するしかない!!今すぐしよう!…

頭おかしくなってたな…やめよう

それにしてもこんなに早く起きることなかったからな、それに腹もすいてきたな

八幡「なんか作るか」

そう言っただけ俺は愛してる布団から勇気を振り絞って、布団から出て、階段をおりリビングに向かった。

リビングのドアの前に行くとき電気が着いており、誰かがいた。

八幡「(こんな時間に誰だ?)」

リビングに入ると、お袋がいた。お袋はキッチンで何かを作っていた。

お袋「あら？八幡早いわね。」

八幡「ああ、なんか目が覚めちまった、お袋は何してんだ？」

お袋「何ってご飯作ってるのよ。朝は小町がいつも作ってるんですよ。今朝は小町がいないから代わりに私が作ってるのよ」

なんかいつつもって言われたところにいろんな意味が含まれてるような…

八幡「まあそうだけど、こんなに朝早くから作ってるのか」

お袋「私今日も仕事だから。朝6時半にはもう出ないといけないの、ちなみにおとうさんはもう出てるわよ」

マジか！社畜になるとこんなに朝早くから出ないといけないのか!?!ならばやはり俺は専業主夫にならなければ!

八幡「た、大変だな。それなら朝飯も俺が適当に作ったのに、どうせ俺一人だし」

俺なんかのためにせっかくもう少し寝れた時間を削ってまで朝飯なんか作らなくてもつと言おうとした時にお袋の顔を見ると暗い顔していた。

お袋「だって…八幡にあと何回私がつたご飯を食べさせられるか…」

ああ…そういうことか、だとしたらこれは甘えるしかないな

八幡「あ、ありがとなお袋、感謝して食べるよ」

本当に親にこんなに感謝するなんて、病気になっていなかったら多分そんなにする機会がなかっただろうな

お袋「っ!!いいえ!しつかり食べて学校に行くのよ!」

八幡「お袋も気をつけて仕事に行つてらっしゃい」

お袋は笑顔でいってきますと言って仕事に行った。

八幡「さあこれからまず平塚先生に病気のこと説明しないと」

それから俺がこれからすることに口を出すとも言わなければな

…

そんなことを考えながらもお袋が作ってくれた朝飯を感謝しながら食べていた。

ご飯も食べ終わり、服も制服に着替えたので学校の方に向かった。

学校に向かう途中に俺が事故をした場所に着いた。思えばここから俺の高校生活が始まり俺の人生が少し変わったことになっていく、言わばここが俺の出発点なのかもなあの時由比ヶ浜の犬を助けなかつたら、俺は多分変わらなかつただろうな。

俺はがらにも似合わずそんなことを考えながらまた学校に向かった。

学校に着くとまだ朝の早い時間のため生徒は誰もいなかった。とりあえず自分の教室に向かい、自分の席につき、イヤホンを耳につけ、寝る体勢になり、ウトウトしてきたので、授業が始まるまで寝ることにした。

キーンコーンカーンコーン

チャイムの音で目が覚めると、周りにはクラスメイトたちがいた。時間を見るとちやうど1時間目が始まる時間だった。

八幡「(やべ、寝すぎて説明しに行くの行けなかった)」

ほんと！八幡はドジっ子ね！オエ・・

1人で何やってるんだよ。まあいつつもひとりだがな！(泣)

そんな感じで脳内漫才をしてるうちに授業が始まった

八幡「(まあ言いに行くのは放課後の方がいいか・・)」

―放課後―

放課後になっただけは平塚先生の所に行くか

あの人ならどんな反応をするだろうか・・やっぱり悲しい顔するだろうか

―職員室―

コンコン

八幡「失礼します。平塚先生はおられますか？」

平塚「比企谷、私はここだ。どうした？部活は行かないのか？」

八幡「：少しお話があるのでよろしいでしょうか？」

平塚「むっ：わかった。ここではあれだから生徒指導室に行こう」

八幡「はい」

覚悟をきめろ八幡、これはもう現実で受け止めなければいけないものなんだ！

平塚「それで？話とはなんだ？」

八幡「はい。その前に平塚先生このことは学校の先生方以外の生徒には他言無用でお願いします」

平塚「あいつらにもか？それは内容にもよるぞ」

八幡「いえ、内容がどうであれあいつらにだけは絶対に言わないでください。でなければ俺も話せなくなります」

俺はできるだけ誠意を見せるために土下座までしてお願いした。

そして平塚先生の目を真剣な目で見た

平塚「…わかった。絶対に言わないと誓おう」

よかった…やはりこの先生はちゃんとお願ひすれば聞き入れてくれるいい先生だな

八幡「それでは話します…」

八幡「まず俺はあと4ヶ月でこの世からいなくなります」

そう俺は話を切り出した

―平塚side in―

私は高校の教師で生徒指導もかねている。そんなある日私は比企谷と出会った。最初のあの作文はひどすぎたのだがあいつはあいつでちゃんとした自分の意見を言える良い奴なんだ。まあ内容はひねくれているし、目も腐っているが、それでもだ。だから私は手元で支えてあげたいがためにあの部活に入れた。まあ強制したのは少し比企谷に悪かったなと思うが。それから1年こいつは変わった。周りに友達ではないが理解し合える仲間ができた。これから楽しい日々がこいつに訪れると思った。

そんな時だった比企谷が、自分から職員室に来た時点で少し嫌な予感がした。とりあえず話を聞くために、二人つきりになれる場所に行き、話を聞こうとした、そしたら比企谷が真剣な顔で学校の先生方以外の生徒に話すなど言ってきた。私はわかったとしか言えなかった、そして話が始まった

八幡「まず俺はあと4ヶ月でこの世からいなくなります」

はっ?…:…は!?!い、今なんといつた?誰がいなくなるんだ?俺?比企谷が!?

八幡「ここに診断書もありますが、新しい病気なのでまだ病名が決まってるじゃないそうです。」

そう言つて比企谷がひとつの封筒を出てきた。

見たくない気持ちでいっぱいだった、だってこれを見たらこいつの言ってることが本当になる

そう思いながらも封筒を開け中の紙を見た。呆然となったがそれでも比企谷がまだ話してくる。

やめてくれ今はもう頭がいっぱいいっぱいパンクしそうだ。

八幡「先生…俺が今からすることに口を出さないと約束してくださいお願いします」

平塚「な、んでだ」

八幡「内容は言えませんが。ただ口を出さないと約束してくださいお願いします」

こいつが何をやる気か考えるんだ私！今までこいつのこと見てきたじゃないか！………ダメだ！分からないくそっ！こんなに頭が悪い自分が恨めしい！

八幡「俺の最後のお願いとして聞き入れてください！」

そうやって比企谷は頭を机にくっつけながら言ってきた。ここでこいつのお願いを聞いたらどうなるか分からないがここまで言われたら仕方がないな…

平塚「わかった。できるだけ善処しよう」

八幡「ありがとうございます」

こいつがやるのを最後まで見届けようそれも私の役目だ。

―平塚 side out―

―八幡 side in―

平塚先生に許可を貰った。あとはあいつらのことをするだけだ。

もう迷わない、ここまで来たらやるしかない。

俺は覚悟を決めた。

交わらない道

奉仕部

―雪乃 side in―

今私は由比ヶ浜さんと小町さんの3人で奉仕部にいる。

あの鈍感谷くんまだかしら？

結衣「ヒツキーなんか遅くない!」

小町「ごみいちゃん何やってるんだろ？」

二人ともそう言いながら顔は寂しそうな顔をしていた。

雪乃「まあ待ちましょう、どうせ彼の行くところはここか生徒指導室なのだから」

いつも通り悪口を言いながら3人で待っていた。

彼に出会ってから私は：いえ、私たちは変わったわ。誠に遺憾だけどそう思ってしまう。元々私は1人でなんでも出来る、誰の手伝いもいらない、と思っていたのを彼に変えられたわ。彼も最初は1人で依頼を解決、本人から言ったら解消ね、してきた、でも由比ヶ浜が私たちを頼ってもいいよって言うてくれたわ。ふふふつあれはすごく嬉しかったわね。それからだったわ、彼が人に頼り始めたのは、いえ、私もね途中から彼にばかり任せていたわ、自分では何もしてなかった。だからあの修学旅行みたいになり、私は1度彼とすれ違ってしまった。

今思えばあのことだって何か意味があったのでは？と最近は思い始めた。でも私はあの自己犠牲のやり方は嫌だった、彼にあれ以上傷ついて欲しくなく、そして、私の胸のもやもやしたものが嫌で、彼を拒絶してしまった。彼は何かを守るために動いたというのに私は自分の気持ちのためだけに、「あなたのやり方嫌いだよ」と言うてしまった。本当に情けないわね、私

―そのあとの生徒会選挙でも、私たちは彼が動いてしまったらまた嫌な気持ちになると思い、彼を遠ざけてしまった、今度は私が解決するんだという気持ちで、その依頼で私自身が生徒会長になればあなたの気持ちを知ることが出来ると思ったわ。

でも間違っていた、彼は裏で私たちのことを思い、依頼を解決した。どんな方法か分からないけどまたひねくれたやり方でやったに違いないわ。

それから私は何も出来ない、無能なのかと思って2人が望通りの日々を作ろうと思ったのだけれど、彼は初めて私たちを信用し、頼ってくれた。その時に言ってくれたあの言葉、「本物が欲しい」

その時はなんの事か分からなかったのだけれど、今ならわかる気がする。そんな彼に私は…いえ私たちは惹かれ恋をしたわ。

雪乃「ふふ」

結衣「どうしたの？ゆきのん？」

雪乃「な、なんでもないわ／＼／＼」

いけないわ、考えてたら笑みがこぼれてしまったわ。気をつけないと…

これからどんなことが起こるのかしらね、楽しみだわ

その時、部室のドアがノックされた

—雪乃 side out—

—八幡 side in—

平塚先生と今部室前にいる。あいつらの笑い声が聞こえるが、俺の今の心はとても冷たい

平塚「比企谷、入るぞ」

八幡「はい」

そう言っつて平塚先生はドアをノックした

雪乃「どうぞ」

雪ノ下の声と同時に平塚先生はドアを開けた

平塚「やあみんな」

八幡「…うつす」

小町「ごみいちゃん遅い!!」

結衣「まあまあ！ヒッキーやつはろー！遅かったね！」

雪乃「あなた今度は何をしたの？もう少し大人しくできないのかしらね」

いつも通りの挨拶に俺は少し緊張がほぐれたが言わなくてはなら

ない

平塚「皆に少し話がある」

雪乃「?なんででしょうか?」

平塚「私からの話ではない。比企谷からだ」

八幡「:俺は今日をもつて奉仕部を辞める」

その時、部室が凍りついたように静かになった。雪ノ下も由比ヶ浜も小町も口をパクパクさせながら、目が見開いたように驚愕している。

平塚「:退部は私が認めた。比企谷はもう奉仕部員じゃない」

まだ3人は頭が混乱しているようだった。が由比ヶ浜が先に戻った

結衣「つ!!どうして!!ヒッキーなんで辞めるの!!」

その言葉で雪ノ下も戻った

雪ノ下「:あなたついていい嘘と悪い嘘があるのを知らないのかしら、あなたの更生はまだ終わってないわ!」

八幡「:うるせえよ、元々強制的に入らされたんだ。それに毎日のようにお前から罵声を浴びて、もううんざりなんだよ」

俺は低い声でそういった。こいつらを突き放さなければならぬ。心を殺して、表情にも出さずにやらなければならぬ

八幡「元々俺はここがそんなに好きじゃない、だから辞める。じゃあな、長い間こんな気持ち悪いやつといってくれて世話になった」

俺はそう言つて部室をあとにしようとしたが

結衣「待ってよ!!どうして!そんなひどいこと言うの!!」

八幡「バカには分かるかよ、だいたい酷いこといっばい言ってきたのはそっちだろうが。」

俺はそう言つて。3人の顔を見た、3人とも訳が分からないような顔をしていた。俺は心が折れそうになって泣き叫びたくなかったが、それを堪えて、部室をあとにした。

— 八幡 side out —

— 小町 side in —

お兄ちゃんが部室を去ってから、平塚先生が帰宅をうながすまで、

ずっと部室内は時間が止まったかのよう静かだった。だけどあの時のお兄ちゃんの顔はものすごく辛そうにしていた。絶対にあれは本音じゃないと分かっていたが、それでもなんでもなんでも言ったのか小町にも分からなかった。

そして彼は…

俺は欲しかったんだ…

でも今はもう届かない…

だから…

奉仕部

—平塚 side in—

これで正しかったのか？こいつらの結末はこれで正しかったのか？

今私の目の前には3人の少女が泣いている。一人の少年の喪失がこれほどのものになるとは…

平塚「…すまない、君らにはつらいかもしれないが比企谷にも思うところがあったのだ」

平塚「私は止められなかった…」

3人ともショックが大きすぎて反応がない

だが私はまだあきらめてないぞ！

平塚「私には止められなかったが、君たちならあいつを戻すことが出来ると思っている」

—平塚 side out—

—雪ノ下 side in—

平塚先生の言葉最初はなにをいっているか分からなかった。でもその言葉に私は反応した。

雪ノ下「どういうことですか？彼はもう戻ってきませんよ」

不安定だったのか、いつもの私らしくない弱気という言葉だ。しかし無理もないと思う

さっきの彼の言葉がそれほどショックなものだったからだ。

私たちは見えはしないけどそれでも信頼し合っていたと思っ
たから…

雪ノ下「：私たちは彼に見放されたんですよ。だからもうこの関係が戻ることはないでしょう」

平塚「違う見放したのではない。それだけは絶対に違う」

雪ノ下「ではなんだというのですか!!」☒ツ

どこにも行き場のない、この感情を私は先生に浴びせてしまった。それほどまでに心が揺らいでいたのだ。

雪ノ下「すいませんでした」

平塚「：大丈夫だ」

平塚「：これは私からの依頼だ」

こんな状況で何の依頼を…？

—雪ノ下side out—

—平塚side in—

比企谷私は絶対君を一人でなんか死なせないぞ!!

これは私の勝手な希望で独り善がりで、君の願いとは真逆なことだが

それでも私はこいつらの教師でもあり君の教師でもあるんだこのままでは絶対にいけない!!

平塚「比企谷を一人にしないでやってくれ…これが私の依頼だ」

平塚「君らにしかできないと思っっている！他の誰でもない…雪ノ下、由比ヶ浜、小町君」

平塚「これだけは確実に言える、比企谷は決して君らを嫌ってなんかない、むしろ大切だから離れようとしているんだ!!」

—小町side in—

昔からお兄ちゃんは独りぼっちだった。

小学校、中学校とずっといじめられていたから…

でもそれはお兄ちゃんが原因じゃなかった。周りの人間が最低だった。

お兄ちゃんの純粋な思いを冗談でみんなに流し、ばかにするそういった人間ばかりだった。

でも今は違う。お兄ちゃんの事でこんなに思ってくれる先生がい

て、お兄ちゃんがいなくなることをこんなにも寂しいと思ってくれる人がいる。

こんなうれしいことはない。全くお兄ちゃんは…いい人たちに
出会って良かったね

だから小町はお兄ちゃんの為、小町の為にこういうしかないのだ。
お兄ちゃんの事言えないな、小町も相当なブラコンだ

小町「雪乃さん、結衣さん」

雪ノ下「…小町さん」

由比ヶ浜「小町ちゃん…」

小町「小町からもお願いです。お兄ちゃんを見捨てないでください」

小町「理由は小町にもわかりませんが、絶対にあんなこと思っていないです」

小町「だから小町からも依頼です。お兄ちゃんをお願いします」

—小町 side out—

—由比ヶ浜 side in—

平塚せんせーの依頼と小町ちゃんのお願ひ…私たちにできるか分からなかった

今まではヒツキーが全部解決しちゃっていたから…でもやらなきやこのまま一生ヒツキーに会えないとも思った。

そんなのは嫌だ！ヒツキーとゆきのんと過ごした時間は絶対に無駄なんかじゃない！

だから…

由比ヶ浜「ゆきのんこの依頼絶対に受けよう？」

私たちにできるか分からない。でも私はヒツキーがサブレを助けてくれて、奉仕部で出会っているんなことをしてきて

こんなにもヒツキーの事が好きなんだから！

―由比ヶ浜sideout―

―雪ノ下sidein―

小町さんと平塚先生と由比ヶ浜さんは強すぎる…

私はまだ動揺が抑えられない。こんなに動揺するなんて思わなかった。

彼の存在が私にこんなにも影響を与えるなんて思わなかった。

でも私も彼との絆が壊れるのは嫌だ。でも私に依頼を受けて、解決できたことがほとんどない全部比企谷君が助けてくれた

だから私にできるか分からない。でも3人が私を頼っている。

そんな3人に私が答ええないというのは私らしくない。だから私は

：

雪ノ下「平塚先生、小町さん、由比ヶ浜さん」

平塚「雪ノ下…」

小町「雪乃さん」

由比ヶ浜「ゆきのん」

不安そうに私を見ている。大丈夫。そんな不安そうに見ないで、私も覚悟を決めたわ

雪ノ下「それは依頼としてではなく、奉仕部で解決して見せます」

由比ヶ浜「ゆきのん!!」

小町「雪乃さん!」

今度は私が助ける番よ。比企谷君

平塚「雪ノ下…頼むぞ。私も協力する」

—雪ノ下side out—

これがどういった結末を迎えるのか今の彼女らには知る由もなかった。

—八幡side in—

これであいつらが俺に関わることはなくなったはずだ。これではよかったんだ。

でも心のどこかで叫んでいる。本当にこれでいいのかと…だが

八幡「つぎはあいつだな」

俺はもう止まらない。残された時間が短い。だから今まで築き上げてきた関係を俺は終わらす。

こうしている間にも俺の病気は進行している。亜麻色のあざとい初めての後輩。あいつも少なくとも関係を持っている。

責任はもう取れない。悪いと思っただけがあいつお知り合いが病気で亡くなると聞くと思うところはあると思う。自意識過剰かもしれないが関係は切っておかないとな。

—八幡side out—

こうして彼の物語は進んでいく。終わりが見えているからか彼が

止まることはもうない
しかしそれは彼女らも一緒だ。彼の残したものがどう実っていくか。

e n d